風七題

小川未明

青空文庫

一

子どもは、つくえにむかって、勉強をしていました。秋のうすぐらい日でした。柱時計は、カッタ、コット、カッタ、コットと、たゆまず時をきざんでいましたが、聞きなれているので、かくべつ耳につきません。それより、高まどの、やぶれしょうじが、風のふくたびに、かなしそうな歌をうたうので、子どもは、じっと耳をすますのでした。

風はときには、沖をとおる汽船の笛とも、調子を合わせたし、また、空に上がるたこのうなりとも、調子を合わせました。

子どもは、これを聞いて、よろこんだり、うれしがったり、もの思いにふけったりして、勉強をわすれることがありました。

子どもには、さまざまな、風の歌が、わかるのでした。

二

東京から、兄さんが、帰ってくるというので、子どもは、停車場へ、むかえにでました。一人、さくにもたれて、汽車のつくのをまっていると、そばに、きれいな女の人が、かばん

をさげて立っていました。

そよ風が、その人の、長いたもとをかえし、ほつれ毛をふいて、いいにおいをおくりました。

子どもは、やさしいすがたが、したわしくなりました。

そのうち、汽車がつくと、女の人は乗りました。けれども、兄さんは、帰ってきませんでした。

子どもは、かなしみをこらえて、田んぼの細道を、わが家の方へもどりました。

青田の上を、わたる風が、光の波をつくり、さっきの、きれいな人のまぼろしがうかぶと思うと、はかなく、きえてしまいました。

子どもは、口笛をならしました。

三

三人の子どもたちが、広い空き地で、遊んでいました。そこには、くるみの木、くりの木、かきの木、ぐみの木などが、しげっていました。

一人が、くるみの木へのぼって、ハーモニカをふきました。一人は、くりの木の下で、竹ざおをもって、かぶと虫をとっていました。もう一人は、ぐみの木のえだをわけて、熟した実をさがしていました。

このとき、ゴウッと音をたて、風が、おそいました。すると、とんぼが、うすい羽をきらめかしながら、ふきとばされてきました。

「やんまだぞう。」と、さおをもった、子どもが、さけびました。

空は、みどり色に晴れて、太陽は、みごとにさいた花のごとく、さんらんとかがやきました。また、ひとしきり、風がわたりました。そのたびに、木々のえだが、波のごとくゆれて、ハーモニカの音も、きえたり聞こえたりしました。

四

夏の晩方のこと、いなか町を、馬にから車をひかせて、ほおかむりをした馬子たちが、それへ乗って、たばこをすったり、うたをうたったりしながら、いく台となくつづきました。

ガラッ、ガラッと、そのわだちのあとが、だんだん、遠ざかった時分、こんどは、ドンコ、ドンコと、たいこをたたいて、町の中を、旅芸人をのせた、人力車が、列をつくって、顔見世に、まわりました。

あかね色をした、夕空には、火の見やぐらが、たっていました。そのいただきに、ついているブリキの旗が、風の方向へ、まわるたびに、音をたてました。

湯屋から、手ぬぐいをぶらさげて、出てきた、おじいさんが、上をあおいで、

「ああ、北風か、あすもお天気だな。」と、ひとりごとをしました。

また、往来では、子どもたちの、たのしそうにあそんでいるわめき声がしていました。

五

すこしの風もなく、木の葉も、じっとしてうごかず、まるで湯の中にひたったような、むしあつい晩でありました。みんな、うちにいられぬとみえて、外で話し声がしました。わたしも出てみると、みんなが、あちらのすずみ台へあつまって、うちわをつかっていました。

わたしも、そこへいって、こしかけました。だんだん、夜がふけると、どことなくしめっぽく、ひえびえとしてきました。畑では、つゆをしたって、うまおいが、ないていました。

「どれ、だいぶすずしくなったから、はいってねましょうか。」と、一人、立ちました。

「みなさん、おやすみなさい。」と、また、一人立ちました。

このとき、あちらの、黒い森の頭へ、ほんのりと白く、乳をながしたように、天の川が見えました。

六

昼ごろから、ふきはじめた風は、だんだん、暮れがたへかけて、大きくなりました。

「いよいよ、台風が、やってきたかな。」

「なんだか、頭のおもい日ですね。」

道をいく人の、こんな話し声が、耳へはいりました。

ぼくは、おとなりの正ちゃんと二人で、カチ、カチと、ひょうし木をたたいて、近所を、火の用心にまわりました。

もう、日がくれたのだけれど、ふしぎに、空は明るくて、けわしい雲ゆきが、手にとるように、見えました。

「この風は、南洋から、ふいてきたんだね。」と、ぼくが、いうと、正ちゃんは、立ちどまって、空をながめ、

「死んだ兄さんが、あの雲に乗ってこないかなあ。」と、いいました。

風は、間をおいて、ふきました。なまあたたかく、しめっぽくて、ちょうど、大きな海のため息のようでありました。

七

子どもは、床の中で、ふと目をさましました。すると、外では、こがらしがふいていました。

その、風の音のたえまに、遠くの方で、犬のほえるのが聞こえました。

「どこで、ないているのだろう。」と、子どもは、耳をすましていました。そのうちに、ねむって、ゆめを見たのであります。自分は、犬の声をたよりに、広い野原を歩いていました。月の光は、真昼のように、くまなくてらしていました。犬の声は、野原のはての村から、聞こえるのでした。

やがて、あかりが、ちら、ちら、見えたので、そこまで、たどりつくと、まだ一軒、ねずにおきている家がありました。自分は、まどへせのびをして、ガラス戸のうちをのぞくと、お母さんらしい人が、病気でねていました。そのまくらもとへ、小さな女の子がすわって、看病をしていました。

「ああ、感心なことだ。」と、思って、自分は、なにかいおうとして、あせると、目がさめてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　14」講談社
　1977（昭和52）年12月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「みどり色の時計」新子供社
　1950（昭和25）年4月
初出：「子どもの村」
　1948（昭和23）年7月
※表題は底本では、「風《かぜ》七一題《だい》」となっています。
※初出時の表題は「風と子ども」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風七題

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/